



基調講演はイングランド国有林の野生動物管理官であるクリスティン・ウェーバー博士が務めた。

シカ捕獲認証制度 シンポジウム 「森・鹿・人 管理の担い手づくり」

▶2017年12月9日
(北海道札幌市)

(一社)エゾシカ協会主催のシンポジウムが2017年12月9日、札幌市内で開催され、北海道を中心に全国から105人が出席した。エゾシカ協会による民間認証「シカ捕獲認証」の取得者を含め、行政や大学関係者、猟友会員、コンサルタントなどが集い、シカをはじめとした野生動物の管理にどう取り組んでいくべきかを議論した。

シンポジウムが開催された趣旨を補足すると、農産物の獣害対策として、山から下りてくる害獣をブロックしたり駆除したりするだけではなく、地域全体の野生動物の個体数を管理する人材を育成し、その人材が活躍できる仕組みをつくり上げていくというものだ。

国は、野生動物の捕獲を次の二つに分類している。主に猟友会員などが許可を受けて行なう「狩猟による捕獲」と、獣害対策のための捕獲や個体数調整の「許可捕獲」と呼ばれるものがある。許可は都道府県知事が行なうが、許可を受けただけでは人道的な捕獲をしたり、食肉として有効利用をしたりするための知識や技術が不足していることがある。また、国全体では個体数半減が目標に掲げられているが、事情が異なる地域ごとにどこでどれだけの個体をどう捕獲すればよいかという計画立案

や実施が難しい状況にある。

エゾシカ協会では、シカなどの野生動物の生息状況や社会的制約、地理的状况などを考慮した地域主体の野生動物管理体制をつくる必要があると考え、知識と技術の両方を備えた人材を育成する取り組みを始めた。「野生動物の管理された捕獲」を掲げ、14年に民間認証「シカ捕獲認証(以下、DCC)」をスタートしている。

シンポジウムでは、酪農学園大学の赤坂猛史教授による講演を皮切りに、基調講演では英国から招いたイングランド国有林の野生動物管理官であるクリスティン・ウェーバー博士が講師を務めた。

イングランドでは、1910年代から木材資源の獲得のために国有林を増やしてきた。その国有林では時代とともに野生動物への対応が変化している。50年代には、増えすぎたウサギの駆除を目的に管理者を雇い入れた。60年代には、野生動物チームを結成し、シカによる環境影響を抑えるために個体数を減らす捕獲に力を入れるとともに、伝統的な天然資源として一定数を保護してきた。70年代から90年代にかけては、野生動物管理者の人材教育体制が確立してきた。そして、95年、英国として、「レンジャー」と呼ばれる野生動物

管理者の認証制度(以下、DSC)がスタートし、四つの基本原則(合法性・安全性・人道性・食肉衛生)が設けられた。国有林のレンジャーの役割は、森林資源とバランスの取れたシカの個体数の管理のほか、シカの生息地と植林地の保護、生態系や気候変動への対応、さらには市民の野生動物の捕獲に対する理解を得ることなど多岐にわたる。博士は自身の考えを次のように述べた。

「レンジャーと国有林の役割は、その時代の経済や環境、社会情勢によって変わってきたもので、今後も時代に応じて変わっていくだろう」

森林総合研究所の松浦友紀子氏からは、現在までにDCCレベル1取得者79人、レベル2取得者1人であり、20〜30代で半数を占めることが発表された。また、DCCは英国のDSCを踏襲していることや、これまでの活動が報告された。なお、協会によると、DCCの主な取得者は猟友会や業者に捕獲を委託する市町村行政担当者が多いとのことである。各講演後は、講演者たちによるパネルディスカッションが行なわれ、会場からも多くの質問や意見が出された。参加者には20〜30代の世代が多かったことから、主催者や講演者からも今後に期待する声が聞かれた。

(平井ゆか)